

日本記者クラブ会報

第 429 号
2005 年
(平成 17 年)
11 月 10 日 発行

〒100-0001
東京都千代田区内幸町二丁目二番一
日本プレスセンタービル
© 社団法人 日本記者クラブ

● 創立記念日の 11 月 1 日

クラブのホームページ立ち上げ

昨年 12 月号で、宇治敏彦企画委員長が新年度の試みとして紹介したクラブのウェブサイトに、創立記念日の 11 月 1 日午前 10 時半にローンチ（進水）しました。

年初から本格的な準備作業に入り、基本的な方針については、会報委員会（住田良能委員長）の了承を得て進めてきたものです。記者研修会や党首討論会で多忙だった夏も、この日に間に合わせようと、囑託の春海二郎さんを中心に企画、会報担当の職員ががんばりました。いたらないところもあるかと思いますが、処女航海ですので、ご寛恕を。
主に以下の 3 点を重視しました。
① もっと会員にクラブのことを知ってもらうことにより、クラブと会員の距離を縮める。② 充実した研究会の内容を、多くの非会員・現役記

者の参考にも供する。③ 事務局が海外のニュースソースと直接折衝することが増えているので、英文のセクションをつくる――。

先輩たちの汗の結晶

創設から 36 年もたち、事務局の職員のなかですら、恥ずかしい話ですが、過去の経緯がまぶらかでないなりつつあります。クラブの性格や会員が主人公だという言わずもがなのことを確認するためあって、これまで 10 年ごとに年史を発刊してきました。しかし、もっと日常的に簡単に、会員だけでなく、各社の若手記者や一般の人々にも、クラブ情報にタッチできるような手段が必要だと考えました。
社からの登録が主体の会員制度なので、人事異動のたびに会員もどん

どんかわります。これで、先輩たちの汗の結晶といふべきクラブの歴史や概要に、パソコンでいつでもアクセスできるようにしました。会員のみなさんがクラブを考えるための基本的な素材として、ぜひ活用していただきたいものです。

研究会の文字アーカイブ

近年のクラブ行事の特徴は、充実した研究会活動にあります。一流の講師が十分準備をしてくれました。ので、内容は立派なものばかりです。予算の関係もあって、会報の記録版にその多くを収容することはできません。サイトの「資料室」へ収録することで、はるかに低コストで、より多くを紹介可能になりました。
それだけでなく持ち場を離れることのむづかしい一線記者を含む、すべてのジャーナリストが、これを参考資料として利用できるようになります。過去の重要な会見も逐次ここへ収めていきたいと思っています。
創立の趣旨が、政府が国賓、公賓などとして招いた外国要人の会見を

主催することなので、これまで外務省の儀典官室や報道課などの協力を得て、多くの重要な会見を実施してきました。

しかし、近年は政府経由でない重要ニュースの来日も増えてきています。こうしたところとの折衝の際に使うため、英文でのクラブ概要や国別ゲスト一覧などのセクションもつくりました。

受け手の理解するために

もうひとつ、このサイトのなかに「談話室」コーナーを設けました。会員が会報に寄稿した取材現場からの報告やエッセーを紹介します。読者や視聴者など情報の受け手の方々に、送り手側の事情や苦勞を知ってもらい、メディアに対して理解と親近感を持つてもらえればと思っています。
過去 2 年くらいの会報記載分をここへ収録させていただきました。新しいものも逐次追加していきます。本来、個々に執筆者のご了解をえるべきものですが、本誌をもってお許しをいただきたいと思います。
なお、不掲載を希望される方があれば、すみやかに削除いたします。

（専務理事 岩崎玄道）

<http://www.jnpc.or.jp/>

IMF世界経済見通し



ラジャン調査局長（左）、バートン・アジア太平洋局長

10・3（月） 記者会見 司会 ケネス・マツ
 カラム委員 通訳 池田薫 出席 60人

04年の上昇は実際の需要が見通しを上回ったため生じたが、今年は需要が見通し水準で推移しているにもかかわらず、高騰している。これは供給側の要因によつていているというのがIMFの見解である。

▼原油高が最大のリスク
 IMFといえば、構造調整の本来元のように思われてきた。経済見通しでも抑制気味というのが、一般的印象だった。

そうした見方からすれば、05年のみならず06年も4・3％程度と強気の世界経済見通しは、意外な印象を受けた。ただ、成長の実態は、「米国と中国頼りであり、原油価格高騰など、下振れリスクが心配」（ラジャン調査局長）ということ、手放して喜べるものではない。

量的緩和政策の解除が議論されつつある日本の金融政策では、バートン・アジア太平洋局長が、いましばらく量的緩和を継続することに期待を込めた。その一方で、景気が持ち直しているいま、財政再建に向けて機を逃さず取り組むことも求めた。この点では、構造調整のIMFの本領発揮といったところだ。

毎日新聞論説委員

今松 英悦

文喜相 韓国ウリ党議長

▼電力供給は軽水炉と別

大統領秘書室長を務めた盧武鉉大統領の側近中の側近だ。盧政権で細る日韓間の政治的パイプをつなぐため昨年7月に韓日議員連盟会長を任されたのも、盧大統領の信任が厚かったからだ。「盧大統領とわたしが言っていることは寸分も変わらない」と韓国人記者に語るほどだ。

このため、盧大統領同様、日本の歴史認識問題に厳しい立場を取る韓日議連会長でもある。小泉純一郎首相の靖国神社参拝について「参拝」しないことを望む」と、参拝に反対の姿勢を明確に示した。日本が国連安全保障会議常任理事国入りを目指していることについても「周辺国の理解が絶対に必要だ」



10・6（木） 昼食会 司会 三橋清二理事
 角南源五委員 通訳 李仁貴 出席 108人

と述べ、歴史認識問題で日本が姿勢をあらためるよう強く求めた。盧政権が北朝鮮との関係を重視し、米韓関係がぎくしゃくしているが、「北朝鮮を国際社会に引き出すための戦略で、米韓離れではない」と述べた。

6カ国協議に絡んで、韓国が提案している北朝鮮への200万キロワットの電力供給に関しては「軽水炉提供と関係なく進める」としながらも、「軽水炉があれば、送電をやめることもできる」と語った。

訪日中、韓国側記者団に、北朝鮮を近く訪問し金正日総書記と会談したいとの意向を明らかにした。盧大統領の訪朝による第2回南北首脳会談を準備するためともみられる。

2年後に控えた大統領選への出馬も「考えていない」としながらも、周囲からの要請があれば出馬する可能性を否定しなかった。ソウル法学部出身のエリートだが、国民の人氣はいまひとつ。だが思わぬ風が吹く韓国政界だけに予想外の展開もありうるだろう。ただ10月末の再・補欠選挙の完敗の責任を取り早々と辞任し、厳しい立場に立たされた。

共同通信編集委員

安尾 芳典

岡部 信彦 国立感染症研究所 感染症情報センター長

10・12(本)研究会「インフルエンザ」
司会 岡部 信彦委員 出席 76人

▼新型ウイルス出現阻止は不可能

毎年、カレンダールの残り枚数が少なくなってくるとインフルエンザの流行が心配される。でも近年、国内外の関係機関が危機感を強めているのは、新型インフルエンザの出現が迫っているからだ。スペインかぜ(1918年)、アジアかぜ(1957年)、香港かぜ(1968年)と、10〜40年周期で大変異を遂げる新型ウイルスは、性質を一変させるため、既存のワクチンが効かない。



「出現阻止は不可能。大流行に向けて導火線に火がついた状態であり、健康被害を最小限に抑えるかは事前準備にかかると、わが国の感染

症監視役の総元締として警鐘を鳴らす。実際、その原型と見られる鳥インフルエンザがベトナム、タイ、インドネシアなどで高い致死率を示し、国内の養鶏場でも大規模な封じ込め対策が強いられている。

目下のところ、鳥からの感染だが、今後、人から人への感染経路が現実化したら……。蒸気船時代のスペインかぜの時は4〜11カ月かけて世界を席巻、死者は4、5000万人にのぼった。現代はわずか数日間で世界に伝播。地球規模で大流行が同時多発し、最悪のシナリオでは死者5億人との推定もあるほどだ。

「国際的な監視態勢の充実とともに、対策は『ボヤ』ではなく『大火事』に備えなければ意味はない」と、解決すべき諸問題を挙げる。

新型ウイルスを迎え撃つには情報伝達の確さが欠かせない。メディアの力を重視するが、いたずらに大騒ぎする不勉強ぶりにも不満を隠さない。このため、「正しく伝えてもらう努力をしなければならぬ」と毎月最終の月曜夜、メディア向けの勉強会を開催している。センター庶務課に申し込めば、だれでも参加できる。

読売新聞医療情報部長

前野 一雄

中貝 宗治 兵庫県豊岡市長

10・14(金)「被災地から」③
司会 菅沼啓吾委員 出席 21人



▼危機管理はトップの責任

「堤防決壊を市民にどういう言葉で伝えるのが適切なのか。防災行政無線のマニュアルはなく、議論しているうちに時間が過ぎた」。昨年10月の台風23号で7人が亡くなり、市街地の大半が水没するなどの被害を受けた豊岡市。中貝市長は、その教訓を伝えようと、「できなかつたこと」とも含めて率直に経験を語った。

例えば、ごみ処理だけでも7カ月かかった。災害時でも分別収集をすれど早く処理できるが、「そうしたノウハウが知られていない」と話す。水に漬かった冷蔵庫が大量に廃棄され処理に追われた。しかし、乾かせば使えるものが多かったのだという。「災害対応のさまざまなノウハウを自治体が共有することが大切

だ」と訴えた。

また、三つの備えが必要と述べた。一つは、堤防整備や森林の保全などの物理的備え。二つ目は、復旧・復興までの体系的法制度の整備、生活再建支援制度の充実などの制度的備え。三つ目が、地域の自然の特徴を知る、リアリズムに徹した訓練、政策責任者の危機管理研修などの意識・態度の備えという。「危機管理は自治体トップの最大の仕事のはずだが、首長は災害の危機管理を知らない」とも述べた。

こんなエピソードも紹介した。浸水で自宅に取り残された市民が「孤立したが、孤独ではなかつた」と語った。近所の人が食料と水を届けてくれたからだという。「人と人とのきずなこそが人間を救う」。被害は大きかつたが、学んだことは多い。近年、大災害が相次ぐ。中貝市長は被災自治体に呼びかけ、課題や提言をまとめたという。災害の教訓をどう伝えていくか。メディアの役割が大きいこともあらためて感じた。

神戸新聞東京支社編集部長

桜間 裕章

前原 誠司 民主党代表

10・17(月)昼食会 司会 熊村剛幸
理事 影山日出夫委員 出席 158人

▼「改革競争」に勝てるか

若い代表の初登場である。衆院で3分の2を占める巨大与党にどう対抗し、次の選挙に向け反転攻勢をかけるか。この43歳の代表はそれだけの力量があるのか、日本の政治のためだけにそれだけの力量を持ってほしいが、どうかなあの疑念もぬぐい切れない。



前原氏は「改革競争」という言葉は何度も使った。改革の基本的考え方は無駄を削ること。代表のレゾンドレートルとして取り組むとまで力を込めた。違う土俵で争っては改革の身をあぶり出すことはできないというのが、改革競争に踏み込む根拠となっている。その上で、改革の五本柱として、①特別会計の見直し②公務員制度改革③国と地方の役

割見直し④公共事業の見直し」と挙げたが、五つ目の柱を失念してしまっただけで、会場から厳しい批判の声に舞われた。あとから省庁再再編と思いついたが、これは代表の心構えとしてはいかにもお粗末だった。

代表就任あいさつでは「戦う集団にする」「温かみにもつとカネを使う」とも表明していたが、それらはどうやら背景に退いたようで、もっぱら無駄遣いをなくすための改革競争を売り出そうとしている。当日、小泉首相が靖国神社に参拝した。前原氏は「参るべきではない」と、このあたりは小泉首相に対抗している様子ばかりやすい。

憲法については改正が持論。9条に関して、集団的自衛権の行使は抑制的であるべきで、周辺事態ぐらいにとどめるとの考え。海外での武力行使はやるべきではないとの基本に立って、国際貢献については、PKO活動において自らを守る程度、さらに近くで活動する他国の軍が攻撃されたときに手助けできる程度の武力行使は認めていくとの考え方だ。揮毫は「天命に生きる」だ。

共同通信編集委員 榊原 元廣

不破 哲三 日本共産党議長

10・17(月)研究会「憲法」②
司会 橋本五郎委員 出席 78人

▼9条改定論の3つの盲点



自民、公明両党を衆院の3分の2を超える巨大与党に押し上げた先の総選挙。あくまで衆院に限

ってのことだが、憲法改正の発議も可能な一大勢力である。民主党の前原誠司新代表も憲法改正に前向きだ。こうした政治状況に懸念が募るの

だろう。冒頭、不破氏は「総選挙後、憲法9条改定の論議が加速しているが、重要な論点を議論の外に置いた

り、議論の角度に現実離れしたりした点がある」と切り出した。盲点の第1は、9条改定論の多くが自衛問題を装って論議されていることだという。「解釈改憲で乗り越えられない最後の1線である、海外での武力行使を禁じる憲法の縛りを取り除こうというのが9条改定論が

台頭してきたいちばんの事情だ」と喝破した。

第2の盲点は、9条改定推進派が軍事偏重の安全保障論に立っていることだという。近著『私の戦後六〇年』でも豊富に触れられている野党外交の実績を紹介しつつ、「今日の世界では、外交こそが安全保障の主要。日本の安全保障の弱点は9条でも軍事力の不足でもない。外交力の弱さにこそ、最大の弱点があることを直視すべきだ」と訴えた。

第3の盲点は、9条を世界がどう見ているかの問題だという。「アメリカのイラク侵略によって、平和の国際ルールを守ることに関心が高まり、その方向性を示す模範として日本の憲法9条に世界の注目が集まっている」と指摘した。

折しも、小泉首相が靖国神社に5度目の参拝をした日。「日本の存在価値を示すのに、9条を示すのか、小泉さんのように靖国を示すのか」との問題提起は鮮烈に響いた。不破氏の日本記者クラブでの会見は実に12回目。揮毫は「希望ある日本の未来のために」だった。

朝日新聞論説委員 恵村順一郎

小山 堅

日本エネルギー経済
研究所理事

10・21(金)研究会「中国経済」⑤
司会 岡田晃委員 出席 10人

▼進行する「西気東輸」



中国で
タリム盆
地など西
部地区の
天然ガス
を東部沿
岸地域に
パイプラ

インで輸送する「西気東輸」プロジェクトが商用化されている。従来の石炭依存から、石油、天然ガスなどへエネルギーの需給構造を高度化しようというものだ。小山氏によれば天然ガス開発は「環境面からもエネルギー政策の最重要課題になっている」という。

中国は01年からの第10次5カ年計画で様々なエネルギー政策を打ち出している。狙いは「エネルギー供給セキュリティの強化とエネルギー需給構造の高度化」。90年にはエネルギーの76%を石炭で占めていたが、現在は「石炭60%、石油30%、天然ガス3%」で、10・5計画の政策実現には輸入拡大とともにこの天然ガス開発が大きなカギを握るとされる。

中国の石油消費量は04年は前年比16%増という高い伸びを見せたが、小山氏によると「今年は価格高騰の影響もあり、伸び率は8%を下回りそう」とか。だが「中長期的には5-10%の高い伸びが続く」と見ている。14億の人口を抱える中国が、持続的成長を続けるためには、エネルギーの安定確保は生命線だ。

このため中国は国内開発ばかりでなくロシアや中央アジアとの関係強化などエネルギー安全保障に向け、多面的資源外交を展開、呼応するよう石油メジャーや中東諸国も中国に熱い視線を送っている。今年、温家宝首相は自ら組長に就いて「エネルギー指導小組」を立ち上げたが、小山氏はこれを「エネルギー政策強化の表れ」と分析する。

最後に小山氏は「日本市場は世界有数だが伸びでは中国と大きな差があり、日本のプレゼンスは小さくなる」と述べた。中国のしたたかな外交や「西気東輸」の話聞くにつけ、資源に乏しく、外交下手の日本がますます心配になってきた。

日刊工業新聞第2産業部長

小池英二郎

朴重彦 ハンギョレ新聞東京支局長

10・25(火)「韓国の新聞法」②
司会 中井良則委員 出席 45人

▼三大紙規制し言論改革を

ハンギョレ新聞は、88年5月に創刊された。ハンギョレとは「一つの民族」という意味。朴正熙政権の言論弾圧で東亜日報、朝鮮日報などを追われた記者たちがつুক্ত。国民から株を募集し、民主的な経営で知られる。創刊当時から90年代半ばまでは大学生らを中心に飛ぶように売れた。それが今、インターネット新聞の時代になって苦戦している。

ハンギョレの論調は、進歩的であり、盧武鉉政権の立場に近い。しかし朴さんは、「親政府」といったレッテル張りをしないでほしいという。北朝鮮政策では政権を支持し、



イラク派兵には反対するなど是非々の立場をとっているからだ。朴さんは当然ながら、朝

中東(朝鮮、中央、東亜日報)と呼ばれる三大紙を規制することに賛成だ。なぜなら歪曲した報道で国民の民主化要求を弾圧してきたからだという。例えば、金泳三政権時代、軍事独裁の残滓である非民主的な制度や法律を擁護した。慶尚道と全羅道という地域感情を刺激し、政策に関する国民の理性的判断をにぶらせた。あるいは、新聞社のオーナー家が経営のみならず、編集方針や人事まで握る。ある新聞社が、大統領選挙で特定候補に資金提供した疑惑も出ている。

いずれも正論で、言論改革の必要も感じられる。ただ、どうしても理解できないのは、政府が改革と称して法律によって新聞を規制することだ。次の大統領選挙で保守政権が生まれたらどうなるのだろうか。再び、法律が変えられ、ハンギョレが弾圧されるおそれはないのか。新聞を選ぶのはあくまでも読者でなければならぬ。独裁政権と激しく戦ってきた韓国の言論人は、権力の危険性を最もよく知っているはずなのだ。

朝日新聞外報部

桜井 泉

アントニオ・グテレス 国連難民高等弁務官

10・26(水) 記者会見 司会 井田由美委員 通訳 池田薫 出席 44人

▼広がる「不寛容」への警告

6月に就任後、すぐにウガンダを訪れ、難民キャンプで一夜を過ごしたという。元ポルトガル首相とは思えない行動的で気さくな人である。8月にはスーダン・ダルフル地方を視察。現場を踏まえた熱のこもった訴えには説得力があった。

グテレス氏が強く訴えたのが世界に広がる「不寛容」への警告だ。テロ防止などを口実に、社会にとつて異質なものを、特に難民や移民を排斥する風潮が広がり、それを利用するポピュリストの政治家がいる。「安全のため」という弁明もあるが、実際には逆で、不寛容は民族紛争や内戦の引き金になり平和への脅威となる。「難民は決してテロリストではありません。むしろテロの最初の犠



牲者なのです。テロリストが難民を装って侵入するなどということは、ありえないのです」。グテレス氏は重ねて、難民保護の重要性を訴えた。

今回の訪日では、日本政府に難民の再定住受け入れを要請したという。UNHCRにとって日本は、米国に次ぐ2番目の資金拠出国として貢献している。

だが一方で、日本の難民受け入れ人数が先進国の中で最低レベルというのもまた事実だ。「地震で被災したパキスタンには何百万人という難民がいる。こうした難民を第3国へ再定住させるのもわれわれの大きな任務。最初は小規模で構わない。日本がわれわれの提案を検討してくれることを期待している」とグテレス氏は語った。

1990-2000年に緒方貞子氏(現国際協力機構理事長)が高等弁務官を務め、この10月からは日本がUNHCR執行委員会の議長に就任した。グテレス氏の期待にこたえ、さらなる貢献ができるかが問われている。

毎日新聞外信部副部長

大木 俊治

辻 哲夫 厚生労働審議官

10・27(木) 「社会保障⑤ 医療制度改革(1)」 司会 宮武剛委員 出席 72人

▼「医の再設計」たくみに説法



辻さんは10月に厚生省が公表した医療制度改革

試案の責任者だ。厚生行政のエキスパートとして省内で熱弁をふるう姿は「辻説法」として有名です、という宮武剛さんの紹介どおり、試案に吹き込んだ医療制度の理想像について思いのたけを懇々と話した。

試案に関するメディアの報道や論説・解説は医療財源をどう確保するか、保険料や窓口負担を誰がどういうかたちで負うべきか、という財政論に傾いている。そうした風潮への静かな抗議の意味もあるのだろう。生活習慣病を退治することこそが医療費の膨張を抑えるのに役立つ確実な手立てであることを、医学界の最新の研究成果なども交えて紹介した。1時間15分の講演時間のうち、50分程度をこの問題に費やした。総理を担ぎ出して国民運動を展開したいと繰り返したことが印象に残った。

肥満、糖尿、高血圧、高脂血は医療界で「死の四重奏」と呼ばれる。恐ろしさを若いうちから理解することが欠かせない。そのためには、かつての交通安全運動を想起させるムーブメントを起こしたい、というものだ。内臓脂肪がたまり続けることで、死の四重奏が現実化する恐れが高くなった状態を「メタボリックシンドローム」と呼ぶ。この専門用語は国民運動の開始と同時に流行語になっていくのだろう。

もうひとつ、熱を込めたのは在宅医療の大切さだ。病院で死ぬことは、いまの日本人には常識。自宅での死亡率は1割強だが、医療機関は8割を超す。東京都内はもっと高い。だが、アメリカの病院死亡率は4割程度だ。日本では、ほとんどの人は亡くなった月の医療費がぐんと跳ね上がる。この問題をどう考えるべきか。医療費の抑制問題で厚生省と対決することが多くなっている経済財政諮問会議の関係者が、あるとき辻さんを「医療改革のロマンチストだ」と評したことを思い出した。

日本経済新聞編集委員兼論説委員

大林 尚

佐野 眞一氏

▼満州と日中戦争から逆照射

あつという間に過ぎた1時間半。現役時代に使っていた社の取材用メモ帳26ページがびっしり埋まった。走りたくてたまらない三冠馬デイーブインバクトよろしくペンはずまらない語りも止まらないノンフィクションの雄・佐野さん。間に2度佐野さんの胸ポケットでケータイが鳴った。さりげなく「いま講演中なのよ」と応答。嫌味さらさらなし。



『阿片王 満州の夜と霧』(新潮社)はこの7月刊行、8刷を重ねた。将来3部作になる満州ものの第1作で、戦後の高度成長の光と影を満州と日中戦争から逆照射して検証した

片を密売し旧満州国と日中戦争の裏舞台を切りまわした怪物里見甫(1896-1965)の想像を絶した生涯を描いた大作である。

偶然、里見の遺児の奨学資金募集名簿を入手したのがきっかけで取材は進むが、はて面妖な人物が次から次へ現れて佐野さんもくらぐらしらしい。450ページの最後は急死した里見の頭蓋骨が阿片吸引者を示してピンクに染まっていたこと、その墓碑が満州国は私の作品と誇った岸信介が記したことで終わる。登場人物は千人にもほる。

佐野さんの眼力のすごさは日中戦争とは関東軍と蒋介石が阿片を奪い合った戦争と位置づけた上で、「阿片」は軍資金のモトだっただけでなく「メディア」であった、つまり売買することによって貴重な情報を得る情報資源だったと指摘したことだ。

だが：と頬をゆるめて言った。「阿片は厄介だがコントロール可能。人間は始末におえない。人間は阿片より阿片だ」。次に書くテーマは満州のエンマ大王甘粕正彦。たのしみ。名誉会員 毎日出身 増田れい子

10・28(金)「著者と語る」①
司会 春名幹男委員 出席 79人

中根 猛 外務省軍縮不拡散・科学部長



▼今月のIAEA理事会に注目

強硬派アフマディネジャド政権の発足で、今夏以降、イラン核疑惑をめぐる状況は一変した。イランが凍結していた核活動を再開し、EU3(英仏独)による対話解決の枠組みが崩れた中で、この問題にどう取り組むのか。外交当局者から掘り下げた説明を聞く機会となった。

2002年の発覚以来、秘密裏の技術研究、ウラン濃縮のための地下施設の建設、「闇市場」からの機器調達などの事実が次々と明らかになったが、イランは「平和利用の権利」を声高に主張するばかり。一方、国際社会は18年に及んだ「隠ぺいの歴史」に不信を強めた。この対立の構図を容易に解くことはできない。

国際原子力機関(IAEA)から国連安保理へ議論の場を移し、圧力

10・31(月)「中東・ロシア」⑩
司会 中井康朗委員 出席 48人

を強めようとの強硬論も勢いを増しているが、重要なのはイランに核開発を放棄させることであり、米国流の圧力には限界もあるだろう。

日本にとって安全保障上の脅威となる北朝鮮の核問題と違い、日本ではイラン核疑惑への関心は高くない。だが米国と敵対するイランとも日本は良好な関係を維持し、2004年にはアザデガン油田の開発契約を結ぶなどエネルギー分野を中心に経済的な結び付きを強めている。それだけに核疑惑の行方に日本も無関心ではいられない。

こう着状態を打開する見通しは立っていないが、「外交的にはあらゆる可能性が残されており、今後を見通すうえで、11月のIAEA理事会が重要になる」という。

会場からは、イランの核疑惑で日本もEU3のように積極的な役割を果たせるのではないかと声が上がった。ちょうど日本の天野之弥大使がIAEA理事会の議長を務めており、日本の役割はこれまで以上に大きくなるだろう。

読売新聞国際部 緒方 賢一

モンテンルパ、ベトナム、そして中国

これはひとりの戦中派の死に損ないの記録である。古い先短い古い会員にも、何か書き残してほしいとの事務局の要望もだしがたく、戦中戦後の60余年を振り返ってみた。

中俣 富三郎

敗戦から6年たっても、私は戦犯死刑囚としてフィリピンの獄舎に

ながれていた。そんなある日、朝日新聞の辻豊記者が姿をみせた。彼とは海軍の同期生だった。私のほか7人の学徒兵が同じ運命に泣いていた。

辻豊記者のアピール

辻記者はぼろぼろ涙をこぼしながら、独房の鉄の扉ごしに、ひとりひとりと握手し、「君たちを救い出すために全力をつくすから、しばらく我慢しろ」と言い残して帰った。

彼は新聞、雑誌、ラジオなどで「残された人々を救え」とアピールし、NHKの平野俊助記者は戦犯者たち

の声を録音して帰り、国民に届けた。また、渡辺はま子さんの哀愁をおびた「ああ、モンテンルパの夜は更けて」がヒットするなど、救出を求め世論がほうはいと高まった。

現地では教誨師の加賀尾秀忍師がキリノ大統領に直訴した。日本の世論に動かされた大統領はついに56人の死刑囚、52人の有期、無期囚の「恩赦」を決断した。

それは、対日賠償請求問題とからんで、大統領にとっては苦渋の決断とみられた。

私たちは1953年夏、盛大な歓迎を受けながら祖国の土を踏んだ。戦犯釈放にまつわるこれらの感動的エピソードは、昨年の夏、NHKの

ハイビジョン番組で克明に描き出された。

囚人墓地の処刑台

1965年、中日新聞・東京新聞の特派員として香港に赴いた私は早速マニラに飛び、かつて私が戦い、敗れ、捕らわれの身となったマニラ周辺の足跡をたどった。

太平洋戦争で唯一の市街戦となったマニラ攻防戦で、わが防衛部隊は鎧袖一触、米軍に圧倒され、生き残った部隊はマニラ東方の山岳に逃げ込んだ。その敗残部隊が東海岸にたどり着き、そこに拠点を構えたとき米軍が上陸、交戦のさなか、住民が

ゲリラ化しているとして討伐隊が繰り出された。そのときに非武装の住民約50人を殺害するという事件が起きた（検事側証言）。

この事件で、47年、14人が起訴され、マニラの軍事法廷で、全員に絞首刑が宣告された。その翌日の「マニラ・タイムズ」は「マニラで戦った日本海軍の士官14人に絞首刑を宣告」と、一面トップで報じた。

マニラ防衛戦のとき、私の小隊が最後に陣取っていた丘陵一帯はきれいに整地され、高級住宅街となっていた。マニラから撤退するとき、私は10数人の部下を失った。そのときの苛烈な戦況が思い出された。

マニラの南40キロのモンテンルパ刑務所を訪れた私は、若き日、暗い5年間を過ごした独房を見せてほしいと頼んだが、囚人が暴れる心配があるからと断られ、裏の囚人墓地に向かった。そこには、もう処刑はないだろうと楽観していた51年正月、14人の仲間が突如、一夜にして処刑された13階段の処刑台がそのまま残され、かたわらには次に処刑される者を埋めるはずの、10いくつの墓穴が草むしてあった。

帰途、私は日本人受刑者を終始温かく処遇していただいた元刑務所長のブニエ博士を訪ね、「モンテンル



なかまた・とみさぶろう 43年
上海にあった東亜同文書院大学から海軍予備学生
に 56年東京新聞入社 65年から中日新聞・東京新
聞特派員として香港 サイゴン 北京に 77年退
社 その後外務省の対外広報誌製作に10年 「北京
週報」の専門家として北京に10年

「パの仲間が東京で待っていますから」と、夫妻の訪日を要請した。その訪日は仲間のカンパで翌年実現した。

4日間かけずり回ってまとめた私のルポは、戦後20年の特集記事として、東京新聞の第1面全面を埋めた。

「サイゴン・米特派員の記者魂」

ベトナム情勢が緊迫してきた65年暮れ、私はサイゴンに転勤した。着いてまもなく、ライシャワー駐日米大使がやってきて、日本人特派員団と深夜までオフレコの懇談をした。

大使は、米軍の介入はドミノ理論にのっとった必然的な行動であると、じゅんじゅんと説いた。日本人特派員の書く記事は「偏向」していると、たしなめにきたようだった。

私には、神出鬼没のゲリラ戦法で強大な米軍に敢然と立ち向かっていく解放勢力の闘いぶりは、まことにあっぱれと感じられた。それには、

比島戦線で米軍のレイテ上陸からわずか半年で50万もの日本軍が壊滅させられた苦い体験があったからだ。解放勢力には民族解放の大義があり、住民の支援があり、細々ながら「北」からの補給があった。

解放勢力による「テト大攻勢」があった翌年、再びサイゴンに赴任したときは、市内のあちこちに夜ごと解放勢力のロケット弾が炸裂していた。また、前年の3月に起きた「ソンミ村虐殺事件」が暴露され、定例記者会見ではその真相を追及する記者団の鋭い質問に軍スポークスマンが立ち往生し、「ノーコメント」を日に20回も連発していた。

「ソンミ事件」とは、「索敵撃滅戦」を展開中の米軍が、中部クアンチ省のソンミ村で、女、子どもを含む約500人の村民を殺害したというもので、まさしく「戦争犯罪」の典型といえた。

私は、自国の軍隊による犯罪を厳

しく追及する、アメリカ人特派員たちの気迫とその記者魂に強い感銘を受けた。

「テト大攻勢」と「ソンミ事件」は、やがて米国内の反戦ムードをおおきく盛り上げ、最大で54万人にも達した米軍の段階的撤退を促した。

北京の東200キロ・沙石峪

サイゴン赴任の直前の65年秋、私は香港駐在の外国人特派員のひとりとして、戦後初めて中国を訪れた。

人民大会堂では、やがて「打倒」される劉少奇国家主席の悠揚迫らぬ姿をかいま見た。陳毅外相は異例の記者会見を行い、「中国人民は、はくズボンではなくとも、必ず水爆はつく」と豪語した。

訪れた各都市はどこも平穏で、まもなく吹き荒れる文化大革命の嵐を予感させるものはなかった。

72年の日中国交回復に伴う記者交換の第一陣として私は74年、北京に赴いた。北京には与野党の大物政治家、財界、文化・芸術界など日本を代表する人物が次々と訪れ、交流拡大につとめた。そして実力者、鄧小平氏と会談した。その会談内容や鄧氏が外国の要人の歓迎宴で行う「講話」の内容を原稿にするのが特派員

の主な仕事だった。

心に残る「鄧小平語録」のひとつ。「帰られたら田中角栄先生によるしくというのが、どうしていけないのか。たとえ（ロッキード事件で）公判中であろうと、田中先生は我々の大恩人なんだ」（河野謙三参議院議長との会談で）。

日中双方は過去のわだかまりを乗り越え、相互認識を深め、友好と協力を拡大し、新しい日中関係を樹立しようとして模索していた。

75年の夏、特派員の任期を終え、帰国の準備にかかっていたとき、報道局副局長の王珍さんが送別会をしてくれた。その席で彼女は「最後にどこか参観したいところはありますか」とたずねた。私は沙石峪を日帰り、しかも自分の車で取材したいと申し出た。彼女は心よくOKし、「せっかくだから、奥さんもうぞ」と家内に同行を勧めた。沙石峪は北京の東200キロの河北省遵化県にあり、貧農たちが荒れ山を切り開いてつくった人民公社として有名だった。長城直下の城壁に囲まれた遵化市で、私は学生時代最後の夏休みを過ごした思い出があった。

車は、後任の片岡繁雄君（道新）、助手の韓佐民君（のち福岡、大阪の副総領事）、私たち夫婦を乗せ、7



1995年の春節に朱鎔基副総理夫妻に招かれた（新華社提供）

月7日早朝、長安街を一路東へと向かった。

郊外の通州あたりから自転車、荷馬車、耕耘機などで激しい渋滞となり、車は動きがとれなくなった。やっと広い道路に出て、運転手の楊君がアクセルを踏み込んだ途端、思わぬハプニングが起きた。

前方からワラをいっばい積んだ馬車が近づき、その後方から自転車に乗った若い女性が、道路を横切ろう

として飛び出してきた。それを避けようとハンドルを右に切ったとき、

車は並木に激突した。直径20センチほどのポプラがぼっきり折れた。その並木にぶつからなかったら、車は道路わきの深い溝に突っ込んでいただろう。

車は大破し、私はあごと胸をフロントにぶつけ、後部座席の真ん中にいた家内は、頭を天井にぶつけて、なかば無意識状態だった。幸い、

ほかの3人は軽傷ですんだ。

壊れた車からやっと家内を助け出したところに、唐山行きの長距離バスが通りかかった。バスの運転手は何かの乗客を降ろして私たちの席を空けてくれ、バスはノンストップで唐山市の病院へと突進した。病院では市内7つの病院から専門医が集められ診察の結果、家内を北京の病院に急送する必要があるということになった。

真夜中の豪雨がやむのを待って解放軍のVIP専用機が飛んで

きた。早朝、首都医院（今の協和病院）に着くと、数人の脳外科専門医が待ちかまえていた。

診察の結果、家内の頭の傷は手術するより自然に治癒するのを待った方がよいということになった。同病棟の豪華な特別室で、私はひと月半、家内は3カ月を過ごした。

王珍さんはあとで「奥さんの頭のけがを心配し、鄧小平さん（当時解放軍総参謀長を兼任）にお願いして軍用機を出してもらったのです」と語っていた。また、王振宇氏（のち外務省スポークスマン）は、「事故は中国で起きた不幸な事故です。入院費は中国政府が負担しますから、ゆっくり療養してください」と言ってくれた。

以上が、北京駐在の特派員が初めて起こした自動車事故のてんまつである。

北京週報「専家」の10年

87年、私は中国の時事週刊誌「北京週報」の「専家」として北京に招かれた。

週報社にはサイゴンで一緒だった時事OBの立花丈平君（元編集局長）がおり、あとから読売OBの関憲三郎君（元北京支局長）がやってきた。

ふたりとも今は亡い。

酒好きの3人はよく飲み、酔うほどに関君が「このままゆくと、中国は世界の大きなお荷物になるね」と嘆いていた。その中国が今や「世界の工場」となり、経済大国にのし上がった。こんな変貌を、当時だれが予測できただろうか。

私は週報社や中国の友人たちとの交友が楽しく、仕事にも適度の刺激があり、こわれるままに10年も北京に住みついた。その間、あの広大な大陸のほぼ全省の名所旧跡をめぐり歩いた。96年に帰国し、その翌年の国慶節に招かれて、中日友好と中国の「現代化」に寄与したとして友誼賞を授与された。

3度目の「受難」は、4年半前に起きた。北京の「老朋友」たちに会いたくなり、北京を再訪した私は、着いた翌朝、背中に激痛を覚え、すぐ日中友好病院に運ばれた。検査の結果、心筋梗塞と分かり、日本に留学した若い医師の適切な処置で危うく一命をとりとめた。ひと月の入院中、「老朋友」たちがぞくぞく訪れ、快方に向かっている私を見て安心し、思い出話に花を咲かせた。

思えば、まことに波乱にみちた、多難な歳月だった。

会員の著書

大阪の扉

千野鏡子会員

昭和天皇の（文学）

田所泉会員

寄贈書

BR C判断基準2005

放送倫理・番組向上機構

佳き凡人をめざせ

塩川正十郎 元衆議院議員

海外から一票を！ 在外投票運動の

航跡 高瀬彦彦・海外有権者ネ

ットワークLA会長

招待券 ご寄贈いただきました

▼朝日新聞社「やまとうた一千年」

「節子の暮らし展 和の心」

「ル」展 その輝きのすべて」

▼日本経済新聞社「北斎展」

▼共同通信社「フラッシュは時代と

ともに 共同通信60周年展」

リレーエッセー

日航ジャンボ機墜落④
1985. 8. 12

白菊、白ユリをザックに差し込んで、今年も御巢鷹へ行って来た。頭

足らずの山道だが、息が弾んでくると必ず当時の惨状が甦る。昇魂の碑に献花して合掌、安全の鐘を鳴らした。鐘の脇では、祈りの言葉がつづられた短冊が、今年も風に揺れていた。「70歳になりました。来年はもう登れません。会いに来られないお母さんを許してちょうだい」。

事故後10年は現場へ行かなかった。「行く気にならなかった」といった方が正しいかもしれない。



「二度と繰り返してはならない」という思いと「二度と見たくない」という

気持ちが交错していたからだ。11年目の1996年の初夏、意を決して現場を訪れた。草一本なかった赤茶色の急斜面は緑に覆われ、つづら折りの登山道が作られていた。多くの遺体が見つかったスゲノ沢周辺には墓標が林立。飛び越えながら進んだ沢には橋が設けられ、勾配のきつい所には手すりもあつた。事故当時、

秋風に揺れる祈りの短冊

御巢鷹に21回目の冬

▼武藤 洋一

耳をつんざくばかりだったヘリコプターの轟音はなく、コマドリのさえずりが席巻していた。

以来ほぼ毎年御巢鷹へ行っているが、「墜落の夏」から20年経ち、現場だけでなく上野村も変わった。平成の大合併には呼応せず、村の名前と形は変わっていないものの、長野県境の発電所建設に伴って、工費用

車両の道路が建設された。県庁所在地の前橋市まで2時間半もかかっていたが、新たに建設されたトンネルを利用して下仁田町から上信越道を使えば、半分の時間で行けるようになった。村長だった黒沢丈夫氏は91歳になった今年6月に引退。10期40年の足跡を残して一村民に戻った。

上毛新聞社の前線基地だった民宿も、主人の他界とともに看板を下ろした。この主人はアユを釣ってきては「これ食ってがんばれ」と励ましてくれた。

当時の上毛は無線機もなく、本社との連絡はこの民宿の「黒電話」のみ。デスクからの問い合わせは深夜まで続き、朝5時には出発していたので、迷惑のかけっぱなしだった。

今年は20年という節目のせいか、御巢鷹にかかわることが多かった。当社は「御巢鷹20年」語り継ぐ日航機事故」を社会面で10回連載した。御

巢鷹を取材する地元紙記者を描いた横山秀夫氏の小説「クライマーズハイ」がNHKでドラマ化されることになり、上毛新聞社でロケが行われた。都内のスタジオには当時の編集局のセットが設けられ、時代考証ならぬ新聞考証という役割でアドバイスさせてもらった。横山氏は御巢鷹で一緒に汗と涙を流しながら取材した元同僚。それだけに「より真実に近づこう」という意識が働いて、あれこれ口を出しすぎたような気もする（放映は11月）。

20年という年月は長い。御巢鷹は毎年、芽吹きと落葉を繰り返して自然が戻り、悲惨な事故を隠しつつある。しかし、事故機の右主翼が墜落直前に接触した県境の尾根は、削り取られた木々の部分だけが今も回復していない。晩秋の御巢鷹は訪れる人もなく、もうすぐ21回目の冬を迎える。

（上毛新聞社 当時・異警キャップ 現在・編集局長）

並走する情報公開と メディア・コントロール

▼福島 香織

(産経新聞社)

中国では国際経済や外交的地位の向上に伴い、情報公開も進んでいる。だが、外国人記者が厳しい取材規制に阻まれることは今も少なくない。決して過激な取材をするわけでないにしても7月、取材を一時中断せざるを得ない状況に直面した。

取材協力者の地方農民が警察に拘束されたのである。俳優の安岡力也に似た面構えから、リキヤとあだ名で呼び、友人としても信頼していた。彼から聞いた話は、決して国家機密に属するような類のものではない農村の日常だ。が、彼は私が訪問したその夜に警察に捕まった。尋問では

「なぜ日本人の味方をする。おまえは売国奴だ」「お前を死刑にすることもできるんだぞ」と責め立てられたという。

人治の国では農民一人、死刑にするくらい造作ないだろう。各所にコネを持つ

知人の尽力で2000元程度の「保釈金」で、その場はなんとかカタがついた。が、その後、知人には黒塗りのベンツ2台で乗りつけた男たちが訪れ、「もっと中国に役立つことをしてくれ」と、圧力をかけた。自分の取材が人の命の安全までかけて報道する価値があるのかという迷いと、この程度で投げ捨てようとするという腹立ちの間で、「ほとぼりの冷めるまで息を潜めることも必要」と自分に言い聞かせるしかなかった。

私がかかわったケースではないが、もうひとつ取材弾圧の例をあげる。やはり7月、広州市太石村で土地取用をめぐる汚職の疑いで、村長に対し村民らが罷免動議を提出する「事件」があった。中国の農村では建前では直接選挙の導入が進んでいるが、現実には選挙はコントロールされ、村長や党支部書記らによる村

民権取がまかり通っている。その状況の中、村民たちが法律を盾に真の民主を取り戻そうとしたわけだ。米留学帰りの民主化活動家や法律家ら心ある中国人知識人と連携した香港、海外メディアが援護に当たったが9月には、当局の圧力で「動議撤回」せざるを得なくなった。その過程で村は取材規制下におかれ、突撃取材を敢行しようとした英国紙記者や協力者の中国人は村長側の雇った男たちに暴行を受け、拘束された。

自由な移動や中国人との交流が制限され、情報といえば人民日報など公式見解しか得られなかった60-70年代と比べ、今の中国取材が比較にならないほど楽になったことは確かだ。主要記者会見はネット中継があり、有人宇宙船打ち上げなど重要イベントはテレビで生中継される。酒泉衛星発射センターや原子力発電所など国の重要施設が外国メディアに公開される機会も増えた。地方出張はまだ地元当局の許可が必要だが、それも徐々に形骸化し、「旅行」で立ち寄ったことにして現場取材が容認されることも増えている。インターネットで中国以外の地域から発信される情報もリアルタイムで手に入

るようになった。

しかし、それが逆に情報のコントロール強化につながっている気がする。与えられる情報が増えたことで、記者はそれを発信すれば報道の義務をそれなりに果たしたような気になってしまふ。太石村の件のように暴力を受け協力者を危険にさらしながら取材しても、必ずしも事態を改善するにたる影響力を発揮できないことも多い。それより中国が喜んで情報提供する国際経済や外交における中国の影響力の方が、ニュース価値があると判断されがちだ。情報が多ければ、その処理に追われ、隠ぺいされた感染症の広がりや農民弾圧への地道な取材に手が回らなくなることもあろう。

こういう状況で、自分が報道すべきは何か、それで誰かが傷つきそうになったらどう守るのか、悩み迷い取材を続ける日々である。中国の新聞が当局の宣伝機関なのは今も変わらない。が、私は日本の記者であり、どんな国にしようとして報道の自由を有する。その矜持は忘れまい。

ふくしま・かおり 1991年入社
大阪社社会部 香港支局などを経て
年から中国総局北京特派員

「日経」片手にトラ番が走る

▼善積 健也
(デイリースポーツ 大阪本社)

走る社長、追うトラ番。早朝の通勤路で展開された「鬼ごっこ」は延々1キロ近く続いた。

阪神のリーグ優勝を目前に控えた9月27日、村上ファンドによる阪神電鉄株の大量保有が明らかになった。以降の動きはここまで報じられてきた通りだ。

突如大株主となって出現した村上氏。当初はそのペールに包まれた実像に「なんやけたいな男が現れたなあ」ぐらいのノリであった我々も、タイガース株の上場提案という事態に至り、取材活動の全面的見直しを余儀なくされる。

村上ファンド

チーム取材に伴う球団幹部や本社首脳へのアプローチは日常的に行ってきたが、今回は内容がまったく違う。経営権の奪取はあるのか。タイガースへの人事介入は……。飛び交う経済用語と経営数値。正直に告白

する。頭が痛い。

2年ぶりのV奪回で一息ついたのも束の間、次なる「村上問題」で7人いる本紙のトラ番(阪神担当記者)たちは再び無休状態へ。

阪神本社の首脳たちもガードが固くなる。

これまではくだけた雑談を交わしながら取材に応じてきた西川恭爾社長。それが一転し、先日などは出勤時に自宅玄関を出た途端、報道陣を振り切るうと最寄駅まで1キロの道程を走り続けた。

元高校球児である本紙の「西川番」



もスーツ姿で伴走したが、日頃の不摂生がたたったのか「途中で息が上がって意識もうろうとなりました」。翌日から西川社長は専用車での出社に切り替え、その後も「鬼ごっこ」はない。

阪神本社での張り込みも毎日欠かさない。幹部や関係者の出入りチェックと所在確認。

早朝の出社からロビーのシャッターが降りる午後7時まで、常にトラ番が監視し続ける必要がある。これまた頭が痛い。

一般全国紙や通信社ほどの取材陣容が取れないだけに、1人がカバードする守備範囲は極めて広い。首脳宅取材から2軍選手の寮に回り、練習を見て電鉄本社、そして夜回り。時

には村上氏を探し求めて東京の「六本木ヒルズ」にも飛ぶ。新幹線の車中で読むのはもちろん「日本経済新聞」……

10月11日に村上氏が阪神本社を訪

れた時は、まさに未曾有の大混乱に陥った。スポーツ紙、一般紙をはじめ、テレビ各局、ワイドショーなどの400人近い報道陣が入り乱れ、村上氏への取材も保有不動産の活用方法から星野SDとの話し合いまで多岐に渡る。阪神本社にこれだけの人が集まったのは初めて見た。

本紙は村上氏に対する直接的な取材ルートを独自に開拓し、様々な形でその動きを報じてきた。一方で、この件の全体像をどうとらえ、スポーツ紙としてどう紙面化していくかについても検討が必要だし、文字通り暗中模索の毎日が続いている。

昨年の球界再編問題とはまた違った角度での取材を迫られ、なおかつ、阪神タイガースというデイリースポーツにとつての「主戦場」を舞台にした大騒動。他のメディアには負けていられない。本家本元のトラ番の意地と誇りにかけて「とカッコ良く言いたいところだけど、本音は「村上はん、ええ加減にしなはれ」です、ハイ。

よしづみ・けんや 1988年入社 阪神担当キャップなどを経て 02年から大阪報道部野球デスク
写真1トップ会議後の村上会見には約400人の報道陣が詰めかけたII阪神本社前で(10・11)

◇大型クラゲの被害◇

風評、燃料高、魚価安で 漁業は三重苦

▶佐々木 紀光
(福井新聞経済部)

エチゼンクラゲが2年ぶりに福井県沖に大量漂着し、その対応に漁業者は頭を悩ませている。「今年は小型のものが目立つが、数が半端じゃない」。重みで網が破られ、越前町内では三カ所の定置網組合が約4カ月も早く、今期の操業を打ち切った。漁を続けてもクラゲと一緒に漁獲された魚は傷がつき値がほとんどつかない。漁をやめても続けても苦悩は続く。

「クラゲに負けた」。越前町の小樽定置網組合(山下一男組合長)は10月5日、今期の漁を終えた。福井県



網に入ったクラゲに悩まされながらも、たも網ですくいあげる漁師たち=越前町沖(9.15)

沖には今年、8月中旬に初めて漂着し、9月上旬の台風14号上陸後から千匹単位で網にかかり始めた。網から引き出しても次の漁には網がクラゲで埋め尽くされている。「漁というより、クラゲを網から出すために船を出している」といった具合だ。そして10月5日、ついに重みで網が破れた。「代わりの網を入れても、また破られるだけ」と緊急理事会を開き操業中止を決定。乗組員は解散、11月からは無収入に。「これから正月にかけて寒ブリのシーズン。まさに書き入れ時なのに」。表情に悔しさがにじむ。

02、03年の大量漂着の教訓から、福井県水産試験場は他府県や製網メーカーと連携し、クラゲ対策に取り組んできた。その成果の一つが改良網の開発。定置網は、導入部分(垣網)の網目を大きくしてクラゲを素通りさせる仕組みで、今夏、本県高浜町沖の実証試験で効果を確認。その網を普及して被害軽減に間に合わせようと県は9月8日、全国に先駆け改良網の購入費の3分の1を補助する制度を創設した。制度は本年度だけだが、定置網は最大約167万円、底引き網は同7万円まで県が負担する。

当初、燃料高や魚価安、さらには「経営的に火の車で、さらに借金する余裕はない」と制度利用に二の足を踏む漁業者が少なくなかった。しかし、県内の日本海沿岸11市町村が県同様に3分の1を補助する姿勢を打ち出したことで、改良網導入を検討する漁業者が少しずつ現れていく。

県はこのほか食材として有効活用しようと、福井県食品加工研究所で塩クラゲへの加工技術開発に取り組んでいる。

メディアを通じて自分たちの

エチゼンクラゲ一口メモ かさの直径は最大2メートル、重さは100キログラムを超えるプランクトン(浮遊生物)の一種。東京帝大の岸上謙吉博士が1921年、福井県高浜町で採取された巨大クラゲを調査した際に、太平洋側の「ピゼンクラゲ」に似ているものの異なるため「エチゼンクラゲ」の和名をつけたのが名前の由来。当時の県水産試験場の初代場長、野村貫一さんが運搬の手伝いをしたため、学名は「ストモロファス・ノムライ」。東シナ海や朝鮮半島南西海域で発生し、対馬海流に乗って日本海を北上する。生態は詳しく解明されていない。

ささき のりみつ 1992年入社 現在 本社経済部

苦悩を広く伝えてほしいと考える漁業関係者の一方で、行政側はクラゲ報道に神経をとがらせる。「越前が」「越前水仙」と違い、エチゼンクラゲはいわば「厄介者」。東京や大阪からもマスコミが取材に訪れ、グロテスクなクラゲが全国放送されると「福井のイメージが悪くなる」「クラゲが福井で発生していると誤解される」と県水産課は危ぐする。

対策会議など取材するマスコミに必ず「エチゼンクラゲといった名前には使わず、大型クラゲで統一を」と強く要請する。しかし正式な名称で、姿をすぐにイメージできることもあって「大型クラゲ」に改名されるま

◇山あいの高齢化の町◇

いろどり
彩 出荷で活性化



▶笠井 秀彰
(徳島新聞小松島支局)

モミジやイチヨウ、ハス、ササの葉……。日本料理に添えられる四季折々の花や草葉は食材を引き立て、見る人の心を和ませる。そんな山の資源を料理の季節感を演出する一つまもの一として商品化したのが、徳島県上勝町の特産品である「彩（いろどり）」だ。

全国の高級料亭や老舗旅館などに出荷されており、今や年間の売り上げは2億5千万円に上る。どこの山にでもあるような葉っぱがお金になる……。普通ならば思い浮かばないようなユニークな事業は、全国的に大きな注目を集めている。

1986年11月、農家4人が20種類の商品を出荷したのが始まりだった。その5年前の81年、町は氷点下13度という異常寒波に襲われた。基幹作物のミカンが壊滅状態となり、被害額はかんきつ類だけで25億円に上った。当時、上勝町農協の営農指導員だった横石知二さん（47）は打開策を模索。ある日、大阪で寿司屋に立ち寄った際、隣に座っていた若い女性客が料理に添えられたモミジを見て「かわいい」「持って帰ろうか」などと言っているのを耳にした。「落ち葉が商品になる」。彩誕生のきっかけになった。

初年度の売り上げは120万円に過ぎなかったが、その後順調に伸び、10年後には1億9千万円にまで成長。昨年度は2億1千万円を売り上げ、出荷開始からの19年間の販売総額が20億円を超えた。現在、彩を出荷している農家は177戸。高齢化が進む町では生産者のほとんどがお年寄り、平均年齢は68歳。最高齢は92歳というから驚きだ。商品は今やつまものだけでなく、ササの葉の器や

はし置きなどを合わせて320種類を超える。

彩の集出荷システムは独特だ。J A東とくしま上勝支所が午前中、町の防災無線を使ったファクスで彩農家へ一斉に注文伝票を流すことから始まる。農家は受注できる商品をJAに電話で連絡。自宅近くの山で商品となる木の葉や枝を収穫し、傷みがないかなど品質を確かめ、谷から引いた冷たい水で洗浄した後、一枚一枚丁寧にパック詰めしてJAに届ける。そして商品は全国各地へ。夕方になると、彩農家のお年寄りたちはパソコンの画面に向かう。自分が出荷した商品がこの市場で幾らで売られたかをチェックするためだ。生産者にとって楽しみの時間といえる。



彩の商品となる木の葉や枝を収穫する上勝町のお年寄り

彩事業がもたらしたのは所得向上だけではない。彩は素材が軽く出荷作業が楽なため、高齢者でも手軽にできる。実際、彩農家は女性が多く、それまで無収入に近かったお年寄りも収入源を得て生き生きと輝き始めた。彩事業が生きがいとなり、町内には寝たきりの高齢者はほとんどいない状況だ。

歯止めがかからない過疎化や少子高齢化など、山間の小さな町村が抱える苦悩は上勝町も同じだ。しかし、町の活性化のために住民が手を取り合って知恵を出し合い、高齢者が元気いっぱい生きる上勝町は、他の自治体にはない独特のまばゆい光を放っている。

一口メモ 上勝町

人口 2145人(10月1日現在)
世帯 865世帯(同)
面積 109.68平方キロメートル
徳島県のほぼ中央に位置し、町の約85%を山林が占める。高齢化率は48.7%と県内一高く、過疎化も進む四国で一番小さな町だが、彩(いろどり)事業のほか、ごみの34分別や2020年までに焼却や埋め立て処分が必要なごみの排出ゼロを目指す「ゼロ・ウェイスト(ごみゼロ)宣言」などで全国の注目を集めている。町内には、農水省の棚田百選に選ばれている「檜原の棚田」をはじめ、郷愁を誘う多数の棚田が点在。町を訪れる視察者や観光客は後を絶たない。

かさい・ひであき 1998年入社 本社社会部などを経て 2002年から小松島支局

■ 会議報告 ■

第89回総務委員会 (10・6 小会議室)

日本記者クラブ賞の内規改定案を作成し理事会に上程した。

第415回理事会 (10・6 大会議室)

一・日本記者クラブ賞内規の改定
「内規」の選考基準のうち第2項「活動が長期にわたるという意味での『敬老賞』でもなく、日の当たらない困難なところで活動している」という意味での『風雪賞』でもない」を削除することを決定した。

二・日本記者クラブ賞の実施

例年通り、クラブ賞規約と改定された内規にもとづき、2006年度の日本記者クラブ賞を実施することにした。

三・国公賞の記者会見について

滝鼻理事長から「日本記者クラブの創立の趣旨を忘れないために、理事会申し合わせ(別掲)を提案したい」との発言があり、全員一致で了承した。

(第415回理事会申し合わせ)

日本記者クラブは国賞、公賞などとして訪日する、諸外国の元首、首相の公式会見の受け皿として、全国の新聞、放送、通信各社が協力して設立したのだが、時間の経過とともにそのことへの会員各社の意識が希

第347回企画委員会 (10・13 宴会場)

宇治委員長から理事会での申し合わせ事項について報告があったほか、今後のゲスト候補などについて協議した。

出席 宇治委員長、大塚、山田、中井(良)、橋本、脇、宮田(一)、春名、稲田、菅沼、マツカラム、影山、飯野、和田、藤村の各委員。
第266回会報委員会

(10・14 シルバールーム)

10月号について意見交換したあと、11月号の編集について協議した。来年1月号の「新春随想」を渡邊恒雄氏(読売新聞)に依頼することにした。

出席 住田委員長、石田、伊藤、仙石、高橋、西田の各委員。
第338回会員資格委員会

(10・14 シルバールーム)

11月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 大塚、金子、伝川、芹川、山本、工藤の各委員。

薄になりがちだ。そこで、外国の元首、首相が公式訪問で来日した場合、国内での会見を日本記者クラブ主催で行うため会員社が一致して努力することを、役員改選が行われた最初の理事会で申し合わせることを慣例にする。

土曜サロン

増える警察の匿名発表

メディアの対応めぐり議論

現役とOB記者が意見交換する第28回土曜サロン(9月24日)は、藤原健・毎日新聞編集局総務と長典俊・朝日新聞社会部次長を招き、約30人が参加して、警察による「匿名発表」の問題を議論した。

ここ数年、当局が事件や事故の発表をするとき、関係者の氏名を公表しないケースが増えているという。当局側はその際、被害者や当事者の人権やプライバシーの保護を理由に挙げ、公表すべきかどうかの判断も当局側がするとの考え方を打ち出すことが多くなっている。なかには、恐喝未遂事件の被害者(女性)の特定を避けるため、年齢を故意に偽って発表したような事例もある。

こうした動きに対し、現場の記者の間には、実名による発表を求める声がある一方で、被害者らの立場を考慮して、匿名発表をそのまま受け入れる空気もあるという。

参加者との意見交換では、「匿名発表」と匿名「報道」は区別して考える問題で、「発表」については原則として実名とすることを当局側に要求すべきだとの考え方で一致した。

しかし「報道」を原則、実名とするよう主張できるかどうかについては、どのように理論づけるか、必ずしも明確な考え方は出てこなかった。

ただ、匿名発表が常態化すれば、さまざまな事実が当然のこととして伏せられ、本来伝えられなければならないニュースが伝えられなくなる懸念があることも指摘された。

この問題の背景には、メディアに対する不信や、個人情報保護法の施行に伴う過剰反応があることも指摘された。メディアが実名による「発表」や「報道」を主張するためには、読者、視聴者の理解と支持を得なければならぬ。メディアとしてそれをどう取り付けるかが、大きな課題であることは間違いないようだ。

*

次回土曜サロンは11月26日午後2時から「9・11総選挙後の政治報道の課題」をめぐって。講師は田勢康弘(日経)、金平茂紀(TBS)の両氏。現役記者の多数の参加を期待している。

(文責・世話人・藤田博司)

会員インタビュー

ニュージーランド大使館二等書記官

ジェニファー・ウィルトンさん

ニュージーランド(NZ)という「人間の数より羊の方が多し」と言われる。「どのくらい多いのですか?」「10倍くらい、ですね」「人口は?」「400万人」ということは羊の数は4000万頭。確かに多い。「日本の人はNZというと、羊とラグビー」と思っています……」「違うんです、それが。ワインだって、映画だつてあるし……」というわけで、来年にはNZ映画祭を日本で実現させたいのだそうだ。

* 高校のときに外国語がフランス語か日本語の選択だったが「フランス語は発音が面倒なので、日本語に。1990年代は日本語のクラスが多かった。今でも日本語がイチバン人気があります。最近では中国語も盛んです。私の妹も

中国語をやっています」とのこと。10年ほど前に福岡の高校に留学したのが、日本との付き合いの始まり。02年1月に外務省入り、今年7月から日本勤務。もっぱら日本の国内政治のウォッチングが仕事になっている。9月の総選挙での自民党圧勝には「本当にビックリしました」とのこと。

* NZは経済改革で知られているが、例えば農業への補助金が打ち切られてから、農家が事業の多角化を



日光東照宮でコートウクと記念撮影

始め、NZ産のワインの輸出も盛んになった。「特に白ワインが美しいです」とのことだ。

NZから日本への輸出品はアルミニウムや木材のような第一次製品のほか、ラム肉、牛肉、野菜・果物等々。「日光の東照宮にまもなくホワイトホースが贈られます」「ウイスキーですか?」「違います! 本当の馬。白い馬です」。

64年(東京五輪の年)から日光の東照宮にはNZ政府から白馬(御神馬)が贈られているのだそうで、10月16日に贈られた9才の白馬は3頭目。名前はKOUKUN(Courtouk)という。日本名は「光徳」だが、KOUKUNはマオリ語で「白鷺・減多に訪れることのない神聖な訪問者」という意味なのだそうだ。

* 「日本語の何がイチバン難しいですか?」と聞くと「しゃべること」という意外な答えが返ってきた。「イチバン好きだったのは文法と漢字」なのだそうだ。首都オークランド生まれの28歳。

(春海)

元共同のお二人を悼む

クラブの名物論客の一人だった久保文男さん(80歳)が10月13日死去した。久保さんが仁王立ちして、堂々と論理明快に理詰め質問すると、たいていのゲストは気おされる感じだった。個人的にも、政局や政界事情をラウンジでレクチャーしてもらった。理路整然としていて、表裏を読み解いた解説だった。

犬養康彦さんなど共同の友人がお棺に新聞と外国雑誌をどっさり入れて送ったと聞いた。11月29日(火)の夕刻、クラブの宴会場でお別れの会が行われる。

もうお一人、退会届けをもらったばかりの内海裕士さん(89歳)が一週間後の21日老衰で亡くなった。西崎哲郎さんが共同へ入社したころの経済部デスクだったという。もっぱら土曜の午後の囲碁の会を楽しんでおられた。

なんの前触れもなく、クラブ賞に役立ててほしいと、300万円をもって飄然と事務局を訪れたのは、3年前だった。そのとき初めてお話をした。クラブ賞基金の寄贈者一覧をみて、かつての同盟の仲間の名前があったので、自分も……と、目を細めて微笑していた。

(玄)

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■新聞配達に関するはがきエッセー表彰式

応募総数3594編の中から最優秀賞と特別賞受賞の計5人が表彰された。最優秀作「尊敬できる仕事」をはじめ入選作30編を収録した小冊子は各新聞販売店を通じ入手できるほか、新聞協会ウェブサイト(<http://www.readme-press.com>)にも掲載されている。(10. 1 10階ホール)
照会先：日本新聞協会経營業務部 Tel：03-3591-4405

■「2005年世界人口白書」記者発表

国連人口基金（UNFPA）が「2005年世界人口白書 平等の約束—ジェンダーの公正、リプロダクティブ・ヘルスそしてミレニアム開発目標」を世界同時発表した。日本では、和気邦夫UNFPA事務局長らが会見し、概要を説明した。(10. 5 宴会場)
照会先：(財)ジョイセフ（家族計画国際協力財団）
Tel：03-3268-3150 URL：http://www.unfpa.or.jp/

■「人間とコンパニオンアニマルとの関係学」研究発表

人間とペットとの精神的つながりについての研究発表。「小学校での動物介在教育の試み」「都市空間でのボニーのいる公園の意義」などの4つのテーマの研究が発表された。(10. 6 宴会場)
照会先：コンパニオンアニマル リサーチ Tel：03-5468-5751
URL：http://www.cairc.org

■OECD東京センター講演会「21世紀型システム・リスクの管理 OECDの分析と提言」

OECDは6年前テロ、地震、ハリケーン、感染症、コンピューターウイルス等の派生的影響が大きく複雑な21世紀型のリスクを分析するプロジェクトを立ちあげた。責任者のピエール・アラン・シーブ参事官が最新の分析をもとに解説した。(10. 14 宴会場)
照会先：OECD東京センター Tel：03-5532-0021
URL：http://www.oecd-tokyo.org

■関東民放クラブ創立20周年記念式典

関東在住の民放出身者でつくる関東民放クラブ（会員

新しいOB会員

マイBOOK マイPR

『鉄鋼業における生産管理の展開』

夏目大介（個人会員 WOWOW出身）

著者がニューメディアに転身する前に勤務した業界の実務を理論化し、体系化したものである。

鉄鋼業の盛衰と日本経済の動きは連動していることが多い。そのなかで「もの造り」業務の中心である生産管理について、それぞれの時代の要請に応じた展開の状況を解明した。

一つの業界に限り、経営管理の一つの分野に絞った研究の発表は、例は少ない。

この本は、学界でいう理論書、実証研究、歴史書などの区分にとらわれず、総合的に一気に書き下した学術書である。（同文館 4300円）

約千人余）が創立20周年を祝った。濱口浩三会長（元TBS社長）のあいさつや長寿の祝いの後、聖路加国際病院の日野原重明理事長が「上手に生き、上手に死ぬ」と題して記念講演。会場をレストランアラスカに移してパーティーも行われた。参加者は約260人。同クラブでは会員を募集している。(10. 31 10階ホール)
照会先：関東民放クラブ Tel：03-3265-7597

秋のゴルフ会（10月25日） 柿原会員が連続優勝

第86回ゴルフ会が藤ヶ谷カントリークラブに5組17人が参加して開催されました。最高の天気と環境に恵まれ、各自意気揚々とスタートしたものの前半戦は団子状態、後半戦の勝負となりました。その結果、「飛ばし屋」の異名を持つ柿原健会員（プレスセンター）が後半を36のパープレーで回る快挙を成し遂げ、NET76で春に続き優勝。通算4回目という偉業を達成しました。

2位は山岸一平会員（日経出身）NET80、3位は同NETの那部吉正会員（産経出身）でした。

懇親会で「柿原会員のハンディ5は連続優勝したことでゼロにしてはどうか」との提案があり、本人も「受け



てたちます！」。全員拍手喝采でこれを承認しました。

帰り際に柿原会員は老練の会員から「今日のプレーは賞賛に値する。心から祝福するヨ」と声をかけられたとか。

次回は来春です。初参加者も大歓迎ですので気軽に参加してください。（小橋）

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766



11月はSALTY DOG

先月から始まった十二支シリーズ。11番目の干支は戌(イヌ)。カクテルもズバリ、SALTY DOGを用意しました。ウォッカ、グレープフルーツジュースなどでアレンジしました。



割烹特製のきりたんぽを原価提供します

(11月21日～12月2日)

秋田魁新報社の協力を得て、きりたんぽ鍋を2000円(1人前)の原価で提供します。吉野忠一東京支社長推奨の秋田の割烹料理店「山蔭」の本物の味をおたのしみいただけるはず。必ず事前予約をお願いします。二人からお受けします。

霜月懐石 (11月7日～12月2日)

素材ばかりでなく、料理の盛りつけでも深まる秋を演出しました。冷酒つきで5250円です。(板長：薬科浩) 先付：銀杏昆布籠盛りなど 椀盛り：しめじ真丈 生物：刺身三点盛り 焼物：鱈柚庵焼 煮物：大根釜揚物：海老磯香り揚げ 食事：もずく雑炊 水菓子：果物



ブイヤベースコース (11月7日～12月2日)

伊勢エビ、カサゴ、牡蠣、ホタテ貝を煮込んだマルセイユ風のブイヤベースがメインディッシュです。これにグラスワインとオードブルの盛り合わせ、サラダ、シャーベットがついてお一人3570円です。ランチタイムにもお出しします。



個室での忘年会・新年会プラン (12月1日～06年2月18日)

メニューを一新し、割安のパーティープランを用意します。社内の集まりやプライベートな会合などにもご利用ください。お一人3500円です(洋食10品+寿司、天ぷら、そば)。飲物・部屋代は別料金です。1500円をプラスして飲み放題(2時間)にすることもできます。10人からお受けします。予約・問い合わせは3503-2724の貸室担当へ。

<会員現況> 法人会員 146社 基本会員 806人
個人会員 1,659人 法人・個人賛助会員 76社 186人
特別賛助会員 72人 名誉・功労会員 10人
計 222社 2,733人

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン (10階)	経理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URLアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能
委員=石田昭彦 伊藤三郎 仙石伸也 高橋利行
豊田 幸 西田善夫 松本侑子
連絡=長谷川和子 本庄五月
(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

「クラブ賞」候補者の推薦を 明年1月末日締め切り

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を、「日本記者クラブ賞」候補としてご推薦ください。締め切りは明年1月31日(火)です。「選考基準」は下記の通りです。

- ①現役ジャーナリスト個人に与えられる賞である(現役という意味は現に活動しているという意味で故人は対象としない)。
- ②スクープ賞ではなく、特に最近数年間の業績が顕著であることが重視される。
- ③その存在および業績が、ジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような個人を顕彰する。

会員および会員社に属する方々が候補有資格者です。推薦者は所定の用紙に記入し、推薦理由と参考資料を添えて提出願います。推薦委員会、選考委員会では添付された資料をもとに審査します。詳細は事務局へお問い合わせください。

<法人会員代表変更>

- ピーエスフジ
浪久圭司代表取締役社長(旧・白川文造氏)
- 青森朝日放送
渡辺芳彦取締役相談役(旧・佐々木禄郎氏)
- 東海テレビ放送
石黒大山代表取締役社長(旧・若松信重氏)
- 福岡放送
古川洋常務取締役(旧・高橋博氏)

<訃報>

久保文男会員(共同出身 80歳)が10月13日、肺炎のため死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

今後の行事予定 (11/2現在)

- 11.11(金) 10:30~11:30 (10階ホール)
マンディルIEA事務局長記者会見
- 11.14(月) 15:00~16:00 (10階ホール)
パキスタン地震NGO報告
木山啓子JEN事務局長
- 11.15(水) 12:00~13:30 (10階ホール)
町田勝彦シャープ社長昼食会
15:00~16:30 (10階ホール)
シリーズ研究会「中国経済⑥」
清水美和・東京新聞編集委員
- 11.18(金) 15:00~16:30 (10階ホール)
「著者と語る②」
青木富貴子氏「731」(新潮社)
- 11.24(木) 15:00~16:30 (宴会場)
マクレーン駐日オーストラリア大使記者会見
- 11.25(金) 15:00~16:30 (10階ホール)
シリーズ研究会「HIV/エイズ②」
根岸昌功都立駒込病院感染症科部長

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。



写真回廊

撮影

青山 芳久

(朝日新聞社
写真センター)

パキスタン大地震(10・8)で多数の学生が生き埋めになった学校倒壊現場。市民による捜索が続けられた。ガリハビブラハンで(10・10)

一步でも近くへ

いつも変わらぬ非情なデスクの命令が飛ぶ。

「現場へ行ってくれ！」

でも、交通の便の悪い、通信手段もままならない、食糧も水も手に入ることが難しいと分かっている被災地へどう行ったらいいんだ？

しかし、記者は行くしかない。例えそれがパキスタンの奥地であろうと、「せめて一步でも近くへ」と——そうやって、世界各地の災害は人々に伝えられる。

「地球市民」という言葉は、地球規模での戦争と飢餓への危機意識から生まれた。が、悲しいことに、私たちがその言葉を実感するのは、多くの場合、遠く離れた地で起きた大災害の惨状をメディアを通して知った時なのではないだろうか。

一人ひとりにできることは少ないかもしれないが、痛む心が「地球市民」という連帯意識を生み出し、何らかの行動につながっていく。

それにしても、写真に向かって叫びたい。

「上に登らないでくれ、その下には助けを求めている人がいるんだ！」

(橋場義之)